伝統芸能の粋

狂言・野村万蔵

―技とこころ―

監修のことば

——田口和夫——
（文京大学教授）

七世野村万蔵が戦後狂言界の新しい波の旗手であったということは、誰も異論のないところであろう。父六世万蔵が第一人者としての評価を得るに至る舞台を的確な演技で支えていた古典の場においても、観世寿夫たちと能・狂言の枠を取り払って創造した新しい演劇の場においても、万蔵（当時万之丞）は中心的存在であった。その時代の万蔵は天与の声・身体を父から厳しく鍛えられ、狂言はいうに及ばず、能・能楽論にまで関心を深めていた。万蔵の舞台の根幹をなす舞歌の二曲はこの時代の修練によって獲得されている。

時は移り、狂言界において東の万蔵は西の四世茂山千作と並び立つ存在になっている。この映画は、その万蔵の現在を核として、現代に生きる狂言、その伝承のあり方にまで分け入ろうとするものである。まず、何よりも近代狂言の完成者としての万蔵の舞台の魅力を記録しておきたいと願った。万蔵の舞台における大きさ、「大竹のごとくあれ」という家訓にもっともふさわしい大名の演技が＜蚊相撲＞の舞台から見えてくる。また万蔵の魅力は愛嬌があってしかも崩れない太郎冠者の演技にもある。＜隠狸＞からその楽しさが知られる。古典・新作において常に創意・工夫を怠らない万蔵の日常も紹介される。

そのような万蔵の魅力が、どのように次の世代に受け継がれてゆくのか、狂言の伝承の厳しさも、その孫太一郎を薫陶する映像の中に知ることができよう。

「磁石」シテ・すっぱ 茂山千作　アド・見付の者 野村万蔵（右）

「蚊相撲」シテ・大名 野村万蔵（右）　アド・蚊の精 野村英丘

「隠狸」シテ・太郎冠者 野村万蔵（左）　アド・主 野村良介

河鍋暁斎画「能画図式」より、狂言「棒縛」

孫 太一郎に稽古をつける

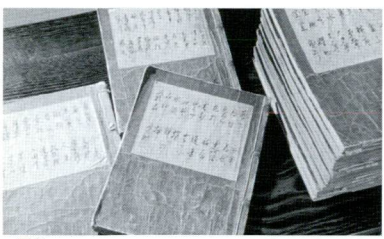
微笑のうちに楽しみを含む・狂言

村山正実（映画監督）

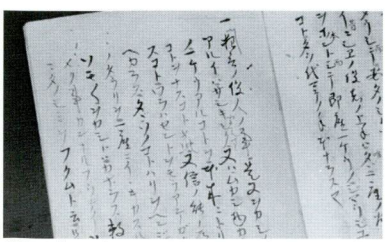
「微笑のうちに楽しみを含む」。この言葉は能の大成者である世阿弥元清が永亨二年（一四三〇年）六十八歳の時に著した『習道書』の中に出てくる。この書は世阿弥が「能の一座を構成する演戯者のそれぞれの稽古のありかた」を記したもので、「最後に狂言の心得るべき事柄を述べる」として、狂言の本質を次のように書いている。

「（狂言は）一般に諧謔といっても、観客が笑いどよめくような諧謔は卑俗な表現だというべきであろう。『微笑のうちに楽しみを含む』といった風情がほんとうにおもしろく、喜ばしい感動である。観客のこうした上品な気分に溶け込んで、観客に静かな笑いを与え、興味を催させるようにすれば、それがおもしろく、しかも幽玄の高い境地に達した諧謔だというべきである」と言っている。

狂言は能とともに室町時代に生まれ、何と六百年以上の歴史を持ったわが国最古の喜劇であるが、今も尚、現代の演劇として生きている。狂言は「セリフ劇」で、「笑い」のドラマではあるが、能が謡と舞の二つの柱から成り立っているのに対し、狂言は謡と舞と芝居の三つの柱から成っており、いわば現代のミュージカルのようなものだと、野村万蔵さんは言っている。そしてリアルな芝居の部分（世阿弥はこれを「物真似」と言った）を支えているのは、「謡」による発声訓練であり、「舞」による身体の線や動きをつくっていくことだと言う。この謡と舞の二つを重要視している万蔵さんは、狂言の芸がどんなに写実的であっても、そこに「美しさ」というものを失ってしまえば古典芸能ではなくなってしまうし、若い時から稽古を通し謡や舞を一生懸命にやり、デッサンをきちっとやった者は、どんなリアルなことをしても、そこに品位を失わない何物かがある、という強い信念を持っている。この映画は、「狂言の狙っている笑いは、決して爆笑ではない。微笑である」ととらえる人間国宝の狂言役者・野村万蔵の舞台での演技を記録し、さらに孫や門人に稽古をつける稽古場の様子、インタビューなどを通して、「規矩正しい存在感のある品格高い芸風」と言われ、また「世阿弥の唱えた歌舞と物真似の両立を体言させている狂言の第一人者」とも言われている万蔵さんの、狂言に対する芸の伝承の技と心を描いたものである。



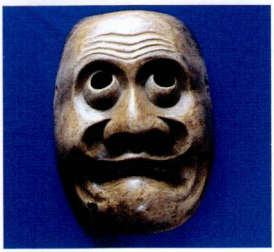
「六義」家の台本ともいうべき狂言254番が伝えられる



世阿弥「習道書」狂言役者の心得が書かれている箇所

「靭猿」孫 太一郎（3才）の初舞台

狂言面　うそぶき



狂言面　賢徳

「三番叟」(式一番之伝)

狂言「茸(くさびら)」　シテ・山伏 野村万蔵、他

毎年夏に行われる装束の虫干し

作 品 名：シリーズ〈伝統芸能の粋〉
「狂言・野村万蔵―技とこころ―」
(35mm／カラー／50分)

企　　画：㈶ポーラ伝統文化振興財団
制　　作：株式会社桜映画社
監　　修：田口和夫(文京大学教授)／
荻原達子(能楽プロデューサー)
スタッフ：制　　作・村山正実／山本孝行
脚本・監督・村山正実
撮　　影・西山東男
応援撮影・山屋恵司／木村光男
撮影助手・今野聖輝／藤江　潔／
田中龍雄
照　　明・藤来義門
照明助手・鎌田　勉
編　　集・吉田栄子
ネガ編集・加納宗子
選　　曲・山崎　宏
録　　音・堀内戦治
アオイスタジオ
タイトル・菁映社
現　　像・ソニー PCL
語　　り・加賀美幸子

協　　力：
国立能楽堂
宝生能楽堂
法政大学能楽研究所
観世文庫
河鍋暁斎記念美術館
MOA 美術館
吉越立雄
亀田邦平
能楽座
萬狂言

写　　真：桑野恒郎

出演者：
野村万蔵
野村万之丞
野村良介(与十郎)

野村英丘
増田秋雄
野村史高
小笠原　匡
井関義久
久保克人
野村晶人
橋本勝利
安田龍雄

野村太一郎
野村虎之介

茂山千作

笛　・一噌仙幸
小鼓頭取・北村　治
脇鼓・鵜沢洋太郎
脇鼓・坂田正博
大鼓・亀井忠雄

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture
財団法人 ポーラ伝統文化振興財団
〒141-0031　東京都品川区西五反田2-2-10　ポーラ第2五反田ビル2階
TEL.03-3494-7653　FAX.03-3494-7597

/DG4Ⓐ1,000 07・2